

DX²(スクエア)による経営革新

DX プロセスを科学的に DX することで
経営効率に革新を



概要

企業が直面する経営課題の多くは、急速な市場変化や競争環境の激化、さらにはグローバル化の進展によって、業務やシステムの複雑化が加速していることに起因しています。このような状況下で、プロジェクトの失敗リスクや DX の推進の遅れ、グループ内の非効率や統一感の欠如が課題として浮き彫りになります。

特に、システム仕様や業務フローのブラックボックス化、部門間や企業間の断片的な情報共有、属人的な運用が、意思決定の遅延や DX の俊敏性の欠如を招いています。また、M&A 後の統合やグローバルな業務標準化の遅れは、企業間の相乗効果を発揮する上で大きな障害となっています。

これらの課題に対する一つの解決策として、業務、システム、データを統合的に可視化・管理する仕組みが注目されています。このような仕組みを活用することで、経営層から現場まで、誰もが全体像を正確に把握し、リスクや課題に迅速に対応できる環境を整備することが可能です。

その結果、プロジェクトリスクの軽減や DX 推進の加速、経営レベルでの意思決定の向上が期待されます。さらに、M&A 後の統合作業を効率化し、グローバルな業務標準化を促進することで、企業全体の一体感を高め、変化への対応力を強化する道筋を提供します。これにより、企業は持続的な成長と安定的な競争力を実現することが可能となります。

プロジェクトリスクの大幅低減



DXプロジェクトの失敗がもたらす重大なリスク

DXに取り組む企業にとって、DXプロジェクトの失敗は「失敗しました」で済む問題ではありません。大幅な売上や利益の損失、さらには社会的信用の失墜といった深刻なリスクを伴います。その多くは、システム仕様を正確に把握できていないことが原因です。意外に思われるかもしれませんが、DXを進めるプロセスは現在でもアナログで運用されており、この非効率な状態が何十年も続いています。

ITプロジェクトは数十年前から存在していますが、いまだに4割ものプロジェクトが何らかの形で失敗しているとされています。この結果、ITベンダーやコンサルティング企業との訴訟問題、さらには売上や利益への影響が社会的なニュースになるケースも少なくありません。

JUAS（日本情報システムユーザー協会）の調査によれば、プロジェクト失敗の要因として複数の課題が挙げられていますが、実はその要因を紐といていくと、全て仕様把握に関することが真因になっています。

↓ Youtube 動画「プロジェクトを失敗させない」



DX のアジリティ向上



急速に変化する市場環境や顧客ニーズに対応するため、企業には DX のアジリティ（俊敏さ）が不可欠です。俊敏に動ける企業は、変化に迅速に対応し、競争優位性を保つことができます。しかし、多くの企業では、このアジリティが低下し、DX の取り組みが遅れるケースが見られます。

DX のアジリティを低下させる 3 つの要因

DX のアジリティ低下は怠慢や能力不足が原因ではありません。そこには社会的な問題が潜んでいます。

仕様理解の分断(組織編)

業務部門は業務プロセスだけを理解し、IT 部門やベンダーはシステム仕様や技術的側面に特化していることが多く、双方が同じ視点で状況を把握できていないことが課題です。この分断により、要件定義や変更対応時に状況が見えず、DX スピードが低下します。

仕様理解の分断(個人編)

～～システムのこの領域は A さん、この領域は B さんと仕様理解が属人化しているのが一般的です。属人化しているので、退職によって有識者がいなくなったり、聞いた内容が間違っているということも横行します。これにより、システムが大きくなればなるほど調整コストが膨大になっていきます。

システムの肥大化・複雑化

長年の改修や追加により、システムは複雑化し、全体像を把握しづらくなっています。この結果、新しい機能の追加や既存機能の変更が困難になり、プロジェクトが遅延する原因となります。

統合的なツールの欠如

業務、システム、データを一元的に管理し、構造的に可視化するツールが存在しないため、関係者全員が共通の理解を持つのが難しい状況になります。これにより、プロジェクトの調整や意思決定が非効率になります。

XERV による解決

XERV は、これらの課題を根本から解決し、DX のアジリティを大幅に向上させます。

仕様理解の統一と共有

XERV は、業務フロー、システム仕様、データ構造を一元的に可視化し、関係者全員が共通の視点で状況を把握できる環境を提供します。この機能により、業務部門、IT 部門、ベンダー間の齟齬を解消し、迅速な意思決定を可能にします。

肥大化したシステムの整理と簡略化

XERV は、複雑化したシステムの全体像を整理し、データやプロセスの関係性を明確にします。この結果、変更の影響範囲が迅速に特定でき、効率的なシステム改修や新機能の導入が可能になります。

統合的な可視化ツールとしての機能

業務、システム、データを統合的に構造化し、一目で把握できる形で提供します。これにより、プロジェクトの影響範囲や最適な変更方法をすばやく特定でき、調整コストを削減します。

DX 人財の質・量の同時向上



2025年の崖という言葉で経産省が警鐘を鳴らしてかなりの年月が経過しました。一部の大手企業では刷新の割合が90%を超えてDXも一服という声もあります。しかし、DXは入れ替えたらずわりではありません。本質には、デジタルを活用してビジネスを常に進化させることがあります。そのためにはDXを常に進化させるプロセスを構築することは重要です。DXを進化されるのは「人」です。現在は一部の人間だけでDXを進めています、本質的な進化は従業員全員で進化しなければなりません。

DX 人財に関する課題

IT系人材の不足とスキルの偏り

DXの中心となるIT人材は、専門知識やスキルを持つがゆえに少数に依存する傾向があります。結果として、属人的な運用や負担の偏りが生じ、DXプロジェクト全体のスピードや品質が損なわれるリスクがあります。

業務部門のDX参画不足

業務部門の非IT人材は、DXのプロセスに深く関わることが難しいと感じているケースが多く、IT部門任せになりがちです。このような状況では、業務ニーズを的確に反映したDXが実現しにくくなります。

全社的なDX推進力の不足

IT部門と業務部門の連携が不十分な場合、全社的なDX推進力が不足し、プロジェクトが個別最適化にとどまる傾向があります。

XERVが解決するポイント

XERVは、IT系人材と非IT人材の両方がDXに積極的に参画できる環境を提供します。その結果、DX人財の質と量を同時に向上させることが可能です。

IT系人材の質向上

専門知識を活かしつつ負担を軽減	XERVの統合可視化機能により、システム仕様やデータ構造、業務プロセスを一元管理できます。これにより、IT系人材が複雑な仕様を把握しやすくなり、問題解決や新規プロジェクトの立ち上げに集中できる環境が整います。
属人的な運用の解消	仕様が可視化され、共有されることで、特定の個人に依存した運用から脱却します。これにより、プロジェクトの継続性と安定性が向上します。

業務部門の非IT人材の参画促進

業務視点でのDX参画を支援	XERVは、業務プロセスやデータを直感的に理解できる形で可視化します。これにより、非IT人材も自らの業務に関連するDXプロジェクトに主体的に参加できるようになります。
専門知識が不要な操作性	ITの専門知識がなくても、XERVを使うことで業務に必要なデータやプロセスを容易に確認・提案できるため、業務部門がDX推進の重要な一員として機能します。

全社的な連携強化によるDX推進力の向上

部門間のシームレスな連携	XERVを全社的に活用することで、IT部門と業務部門の間で共通の理解基盤が形成され、スムーズな情報共有と連携が可能になります。
DX推進力の底上げ	DXの中心となるIT系人材の能力を最大限に活用しながら、業務部門の参画を促進することで、全社的なDX推進力が向上します。

DX 人材の質・量の同時向上

導入による具体的な効果

IT 系人材の効率向上

XERV を活用することで、IT 系人材が仕様理解や情報共有に費やす時間が削減され、より付加価値の高い業務に集中できます。

業務部門の主体的な関与

非 IT 人材が DX に深く関与できることで、業務部門の知見が DX プロジェクトに反映され、実現性の高い改革が推進されます。

全社的な DX 体制の構築

IT 系人材と業務部門が一体となり、俊敏かつ効率的な DX 推進が可能になります。

まとめ

XERV を全社で活用することで、DX に必要な人材の質と量を同時に向上させることができます。IT 系人材の専門性を強化し、業務部門の非 IT 人材を DX に巻き込むことで、全社的な DX 推進体制を構築します。これにより、企業は急速な変化に対応し、持続的な競争優位性を確立することが可能となります。

↓ Youtube 動画「全員 DX 運動」



視認性向上による意思決定性の向上



DXの進展に伴い、経営陣には、システムやデータの全体像を正確に把握し、それに基づいた迅速かつ適切な意思決定を行う能力が求められています。しかし、現状では次のような課題があり、多くの企業がこの要件を十分に満たせていません。

課題：経営レベルの視認性と意思決定性の低下

情報のブラックボックス化

システム仕様や業務プロセスの詳細が経営層に共有されず、IT部門や担当者に依存している場合が多いです。これにより、経営陣が意思決定を行う際に必要な情報が不足し、判断が遅れたり誤った方向性を選ぶリスクが高まります。

断片化した情報提供

システムや業務プロセスに関する情報が部門間で断片化しており、経営層が全体像を把握するためには多大な労力が必要です。結果として、全社的な戦略立案やリスク管理が後手に回ることがあります。

意思決定の属人化

特定の担当者や部門にしか分からない仕様やデータのため、経営陣が判断を下す際にその担当者に依存せざるを得ない状況が生じています。

XERVによる解決策

XERVは、経営陣がシステム仕様や業務プロセスの全体像を直感的かつ的確に把握できる環境を提供します。これにより、情報のブラックボックス化や断片化を解消し、意思決定をより迅速かつ正確に行えるようになります。

システム仕様・業務プロセスの可視化

- **全社統一の可視化プラットフォーム**
XERVは、業務フロー、システム仕様、データ構造を一元的に管理し、経営層が理解しやすい形で可視化します。これにより、経営陣は「どのプロセスがどのデータやシステムに依存しているか」を明確に把握できます。
- **リアルタイムの状態把握**
システムの現状や変更点をリアルタイムで視認できるため、経営判断に必要な最新情報を即座に取得できます。

情報の統合と共有

- **部門間の情報統合**
XERVを導入することで、部門ごとに分散していた情報が統一され、経営層に対して全社的な視点からの情報提供が可能になります。これにより断片的な情報に頼ることなく、全体像を基にした意思決定が行えます。
- **誰でも理解できるビジュアル化**
IT専門知識がない経営陣でも理解しやすいビジュアルで情報を提供するため、迅速な意思決定が可能になります。

意思決定のスピードと正確性向上

- **リスクシナリオの迅速な分析**
XERVの統合可視化機能により、変更や障害発生時の影響範囲が即座に把握でき、リスク管理のスピードが向上します。
- **属人化からの脱却**
システム仕様が一元管理されることで、特定の担当者に依存せず、経営陣が直接情報にアクセスして意思決定を行える環境を整えます。

視認性向上による意思決定性の向上

導入による具体的な効果

戦略的意思決定の迅速化

経営層が最新のシステム仕様や業務データに基づいて戦略的な判断を迅速に行えるようになります。

リスク管理の強化

潜在的なリスクや変更に伴う影響を事前に可視化することで、適切なリスク対応策を早期に立案できます。

経営と現場の連携強化

経営陣と現場の情報格差が縮まり、全社的な一体感を持って DX を推進できます。

まとめ

XERV を全社で活用することで、経営層がシステム仕様や業務プロセスの全体像を把握しやすい環境が実現します。この視認性の向上により、経営陣は迅速かつ正確な意思決定を下せるようになり、DX の進展を効果的に推進することが可能です。結果として、企業全体の競争力が高まり、持続的な成長を支える基盤が整います。

データドリブン経営の実現



近年、データを活用して意思決定を行う「データドリブン経営」の重要性が注目されています。データドリブン経営は、定量的な根拠に基づいて迅速かつ的確な経営判断を行うことで、競争優位性を築くための基盤となります。しかし、現実には「データドリブン経営」を掲げながらも、十分に実現できていない企業が多いのが現状です。

現状と課題：なぜデータドリブン経営が進まないのか

データの分散とサイロ化

多くの企業では、部門ごとに異なるシステムやツールが使用されており、データが分散しています。この「サイロ化」により、全社的なデータ統合が難しく、意思決定に必要な包括的な情報が得られない状況が生じています。

データ品質のばらつき

収集されたデータが統一されたフォーマットや基準で管理されていないため、分析に必要な準備作業に時間と労力がかかります。さらに、不正確なデータが意思決定の精度を損なうリスクも存在します。

データ活用の属人化

データの分析や活用が一部の専門チームや担当者に依存しているため、経営層や業務部門がデータを直接活用できないケースが多く見られます。この属人化は、意思決定のスピードや柔軟性を阻害する要因となります。

データ活用文化の未成熟

「データドリブン経営」を実現するためには、全社的な文化の変革が求められます。しかし、データに基づいた意思決定の必要性が十分に浸透しておらず、従来の経験や直感に基づく判断が優先される企業も少なくありません。

XERV がもたらす解決策

XERV は、データドリブン経営を実現するための包括的なソリューションを提供します。業務、システム、データを統合的に管理・可視化する XERV は、次のような形で課題を解決し、企業がデータを最大限に活用できる環境を整備します。

データの統合とサイロ化の解消

XERV は、部門やシステム間で分断されたデータを統合的に管理します。全社的なデータ基盤を構築することで、各部門のデータを横断的に分析・活用できるようにし、経営層が必要な情報を迅速に把握できる環境を提供します。

データ品質の向上

XERV は、データ構造の標準化やクリーニング機能を備えており、正確で一貫性のあるデータを提供します。この仕組みにより、分析作業の効率を高め、データに基づく意思決定の信頼性を向上させます。

データの可視化と全社共有

XERV は、業務やシステムデータを視覚的に分かりやすく可視化する機能を備えています。これにより、経営層や業務部門の担当者でも容易にデータを活用でき、属人化を解消します。また、データに基づく共通の認識が全社的に形成され、意思決定のスピードと一貫性が向上します。

データ活用文化の醸成

XERV を導入することで、データに基づいた意思決定の重要性が全社的に認識されます。これにより、業務プロセスや意思決定の各段階でデータ活用が当たり前となる企業文化を醸成します。

データドリブン経営の実現

XERV がもたらす解決策(続き)

成果と期待される効果

XERV の導入によって、企業はデータを経営判断の中心に据えることが可能となります。これにより、以下の効果が期待されます。

- **迅速かつ正確な意思決定**
統合されたデータ基盤に基づき、経営層がリアルタイムで状況を把握し、適切な判断を下すことができます。
- **業務の効率化とコスト削減**
データ活用の効率が向上することで、無駄な業務プロセスが削減され、運用コストの最適化が図られます。
- **競争優位性の確立**
データに基づく予測や分析を活用することで、競争環境において迅速な対応と的確な戦略を展開できます。

まとめ

XERV は、データドリブン経営を実現するための不可欠なツールとして、企業の持続的な成長と競争力強化を支援します。分散されたデータやサイロ化された業務を統合し、正確で一貫性のある情報基盤を構築することで、企業は変化の激しい環境においても俊敏かつ確実な意思決定を行える体制を整えることが可能です。データを中心に据えた経営がもたらす効果は、企業の未来を大きく変える原動力となるでしょう。

海外も含めたグループ会社内業務標準化促進



企業が国内外にグループ会社を展開している場合、業務プロセスやシステム仕様、データ管理の標準化が DX 推進の鍵となります。しかし、現実には以下のような課題が存在し、標準化の実現が困難な状況に陥っています。

グループ会社内の業務標準化が進まない課題

業務プロセスやシステムの多様化

各国や各グループ会社が独自の業務プロセスやシステムを採用しているため、全社統一の業務フローやデータ管理が難しくなっています。この多様性は、グローバルでの意思決定や効率的な運営を阻害します。

データの断片化と非統一性

各グループ会社が異なるシステムやフォーマットでデータを管理しているため、データの統合や分析が難航し、迅速な意思決定が妨げられます。

言語や文化の壁

言語や文化の違いが、業務プロセスやシステム仕様の統一において障害となることが多く、標準化の取り組みを遅らせる要因となっています。

XERV による解決策

XERV は、業務、システム、データの統一管理を可能にするツールとして、グループ会社全体での業務標準化を強力に支援します。その機能と効果は以下の通りです。

業務プロセスの可視化と統一

● グローバルな業務フローの一元管理

XERV は、各グループ会社の業務プロセスを統合的に可視化し、全社共通の業務フローを定義できます。これにより、地域や会社ごとのばらつきを排除し、標準化を促進します。

● 標準プロセスへの柔軟な適応

XERV の柔軟な設計により、各拠点のローカル要件に合わせて、全社標準の業務フローを維持できます。これにより、グローバルとローカルのバランスが取れた運用が可能になります。

データ管理の統一と可視化

● 統合的なデータ構造の管理

XERV は、グループ会社間で異なるデータフォーマットや管理方式を統一し、全社的なデータ標準確立を支援します。これにより、迅速かつ正確なデータ分析や意思決定が可能になります。

● リアルタイムなデータ共有

全社で統一されたデータ管理プラットフォームを提供することで、どの拠点のデータでも活用できる環境構築を支援します。

言語・文化の壁を超えた運用支援

● 多言語対応

XERV は多言語対応を想定して設計されており、各地域のユーザーが業務プロセスやシステムを定義・参照できるようにします。

● シンプルなインターフェース

直感的で視覚的に分かりやすいインターフェースを採用しているため、言語や文化の壁を超えてスムーズに運用できます。

海外も含めたグループ会社内業務標準化促進

導入による具体的な効果

1. 業務効率の向上

グローバルで統一された業務フローにより、プロセス間の無駄や重複を削減し、効率的な運営を実現します。

2. 迅速な意思決定

統一されたデータ基盤により、経営層はグループ全体のデータをリアルタイムで分析でき、迅速かつ適切な意思決定が可能になります。

3. コスト削減

システムや業務の統一により、重複投資や運用コストを削減します。また、業務標準化により教育や運用の効率化も実現します。

まとめ

XERV を全社で活用することで、国内外のグループ会社間で業務、システム、データの標準化を強力に推進することが可能です。これにより、全社的な業務効率の向上、迅速な意思決定、コスト削減を実現し、グローバル市場での競争力をさらに高める基盤を構築できます。

MA 後の早期シナジー創出



企業の M&A（合併・買収）後、シナジーをいかに早く創出するかが、その成否を大きく左右します。しかし、統合プロセスにおいては、業務やシステム、データの違いが障壁となり、シナジー創出が遅れるケースが少なくありません。このような課題を解決するために、XERV は強力な支援を提供します。

MA 後の統合プロセスにおける課題

業務プロセスの違い

買収元と被買収先で業務フローや運用方法が大きく異なる場合、それらを統合するために多大な時間とコストがかかります。

システム仕様の非互換性

それぞれの企業が異なるシステムを使用している場合、統合作業が複雑化し、データやプロセスの連携がスムーズに進まないことがあります。

データの不統一とサイロ化

両社のデータ構造や管理方式が異なるため、データの統一や一元化が難しくなり、迅速な分析や意思決定が妨げられます。

属人的な知識依存

被買収先の業務やシステムの詳細が特定の担当者に依存している場合、統合プロセスが停滞するリスクがあります。

XERV による解決策

XERV は、M&A 後の迅速かつ効果的な統合プロセスを支援し、早期シナジー創出を実現するためのソリューションを提供します。

業務プロセスの統合と最適化

- **業務フローの可視化と統一**

XERV は、買収元と被買収先の業務プロセスを可視化し、統合すべき部分と現地適応すべき部分を明確にします。これにより、無駄や重複を排除し、効率的な統一業務フローを構築します。

- **段階的なプロセス統合**

各種仕様が可視化されることにより、異なる業務プロセスを標準化しつつ、必要に応じてローカルな運用方法を維持するという計画を段階的に立案出来ます。

MA 後の早期シナジー創出

XERV による解決策(続き)

システム統合の効率化

- システム仕様の一元管理

XERV は、両社のシステム仕様を統合的に管理し、重複部分の排除や互換性の課題を解消します。これにより、システム統合のスピードが大幅に向上します。

- 影響範囲の迅速な分析

統合プロセスで変更が必要な箇所や影響範囲を即座に把握できるため、的確な対応が可能です。

データ統一の推進

- データ構造の標準化

XERV は、異なるデータフォーマットや管理方式を統一し、全社的なデータ基盤を構築します。これにより、迅速なデータ分析と意思決定を支援します。

- リアルタイムのデータ共有

データ仕様の認識一致により、両社間で最新の情報を共有できる環境を整えます。

属人化の排除と知識の共有化

- 知識の可視化

XERV は、業務やシステム仕様を一元的に可視化するため、属人的な知識への依存を排除し、誰でも統合プロセスを理解し進められる環境を提供します。

導入による具体的な効果

早期のシナジー創出

業務プロセスやシステムの迅速な統合により、MA 後の目標を早期に達成し、収益向上やコスト削減を実現します。

統合プロセスの効率化

XERV を活用することで、複雑な統合プロセスがシンプルになり、時間とリソースの削減につながります。

リスクの低減

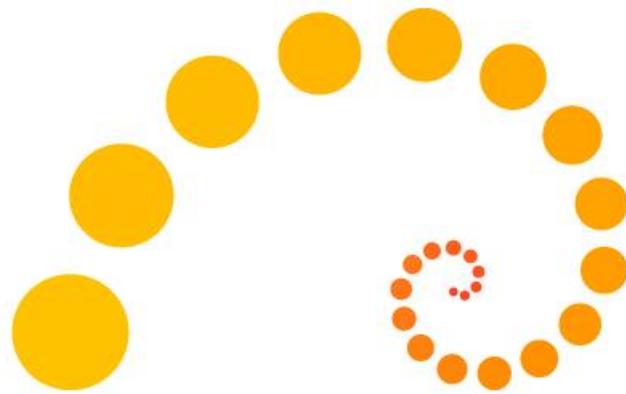
各種仕様の可視化により、統合プロセスにおけるリスクを最小化します。

全社的な連携強化

統合後の新しい体制で、全社が統一されたビジョンのもとで動けるようになります。

まとめ

XERV を導入することで、M&A 後の複雑な統合プロセスを迅速かつ効果的に進めることができます。業務、システム、データの可視化と統一管理により、早期のシナジー創出を実現し、M&A の成功確率を大幅に向上させます。これにより、企業は統合効果を早期に享受し、持続的な成長の基盤を確立することが可能です。



LEXAR